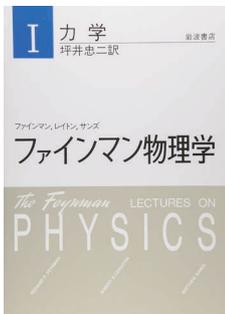


# 好きなこと好きなだけ

八戸工業高等専門学校 産業システム工学科 電気情報工学コース 教授 熊谷 雅美

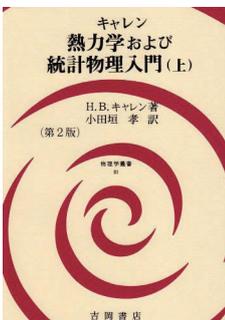
特に、共通したテーマはなく、単純に自分が面白いと感じた本の紹介となっています。専門分野については、専門が「光物性」という少々特殊な分野のため、数学、物理の基礎的教科書で初学者にお勧めしたいものについて選びました。



## ファインマン物理学 全5巻

Richard P. Feynman

第3巻「電磁気学」を高専専攻科1年次(大学3年相当)の電磁気学の教科書として使っています。唯一、ずっと側において使ってもらいたいと考えて使っているテキストです。実は電磁気学だけは、少し例外的に教科書としても使えると思いますが、それ以外の巻については、教科書ではなく、物理の考え方を理解するための副読本のような性格が強いように思われます。ということで、これを読んでも物理の成績が上がるとは限らないので、試験勉強には向いていないでしょう。物理の考え方、自然の法則について学びたいなら第一に読むべき本として推薦します。



## 熱力学および統計物理学入門 上・下

H.B. キャレン

熱力学が大嫌いであった。高校物理のように、いろいろな法則がほとんど独立に現れ、それらの間には深い闇が広がっているという印象を持っていた。そんな中、何気なく手に取ったこの本には驚くようなことが書いてあった。(熱力学では、10の24~5乗もの原子(分子)を含む系を対象とするが)「系を巨視的に記述するには、ほんの数個の変数でこと足りる…」この本のようなやり方を公理的熱力学と云う。物理の背景の上に少数の公理を立てて、論理的に理論を展開するというものである。従来の熱力学のように理論の構成が見通しにくい分野に対しては非常に有効な方法であり、優れたテキストであると考えます。



## 数学30講シリーズ 全10巻

志賀浩二

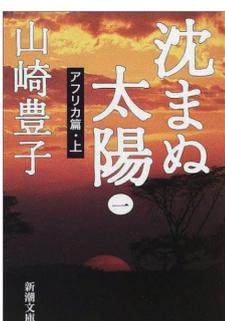
学系では、多くの場合数学の専門的な講義が十分ではありません。それを補うための自習用の本として推薦したいと思います。実は、これは第1巻の序に初学者用と書かれていますが、理工系学生にとっては、それほど簡単な本ではありません。あくまで数学者が書いた本であり、議論は厳密です。まず最初に数学の厳密さに触れ、これに慣れてもらいたいと思います。数学のキモチがわかれば、物理や工学とよいオトモダチになれるかもしれませんよ。



## 陋巷に在り 全13巻

酒見賢一

主人公の名前を伏字にすると、誰のことを書いた本なのか想像できないと思う。孔子とその高弟である顔回を中心とした小説である。儒教というえら-いひとの、えら-いひとによる、えら-いひとのための創始者たちの物語であるが、実のところファンタジーの要素がきわめて強く、史実を元にしながらもきわめて自由に独自の世界を作り出している。作者は哲学科の東洋哲学専攻出身で、デビュー作の『後宮小説』を始めとして、中国史上の人物をテーマとすることが多い。いろいろなテーマがごちゃ混ぜになった奇妙な小説であるが、読みでのある作品である。



## 夢十夜 他二編 (「文鳥」収載)

夏目漱石

明治41年の新聞小説である。漱石を1冊と考えて最初に頭に浮かんだのは、やはり短編の「文鳥」であった。漱石は、英語(本業)、漢詩に秀でているためか、文章の非常にうまい作家だと思うが、美しい文章といえば、「文鳥」と長編の中の一節で「雨の降る日」(『彼岸過迄』)をあげておきたい。さて、この「夢十夜」という作品は、『我輩は猫である』と並んで最も後世へのインパクトが大きかった作品ではないだろうか。(鉄火肌調のセリフがでて、時代を感じさせる部分はありますが)明治期の文学とは思えないような十篇の儂い小品群です。これが気に入ってもらえたならば、『それから』以降の長編も是非読んでみてほしい。



## オーケストラの音楽史 大作曲家が追い求めた理想の音楽

パウル・ベッカー 著、松村哲哉 訳

原題は“The Orchestra”である。オーケストラの魅力はその多彩な音色にあると考えることができる。このことは、オーケストラが弦楽合奏から始まり、徐々に楽器の種類を増やすという形で発展してきたということと無関係ではない。この本では、オーケストラが発展する上で重要な作曲家を上げながら、主としてドイツでの発展とその限界、その後のドイツから離れた場所での民族的な要素を含んだ展開などについて、平易な言葉で丁寧な解説している。思いがけない視点からの考察などもあり、大変面白く読ませていただいた。



## ブルックナー 交響曲

ハンス＝ヨアヒム・ヒンリヒセン 著、高松佑介 著

ブルックナーは変人であると云われる。ぱっとしない風采で、年甲斐も無く少女に一目ぼれしてはプロポーズを繰り返す、自分の作品に対して自信が持てず改訂を繰り返す…などと並べてみると、確かに、痛いおっさんといわざるを得ない。しかし、そんな人物が生み出した音楽の大きさときたら…。通常ブルックナーに関する本では、ブルックナーの人となりにより多くの筆を割いているのに対し、この本ではそこに寄り道することなく、ブルックナーの音楽に対する姿勢、そしてその音楽自体について真正面から解説している。小さい本ではあるが、大変面白かった。



## 吉松隆の調性で読み解くクラシック

吉松隆

著者はクラシック（現代作品なのにクラシックと呼ばれる！）の作曲家であり、前衛的でゲロゲロ（本人言）な現代音楽に異をと立て、“美しい”現代音楽を発表している。この本は、そのような人が西洋音楽をその調性（ハ長調とか、イ短調とか云われるもの）に注目して解説したものである。平均律を使う限りでは調性というのは、単なる音高の基準の違いに過ぎない。それでは、調性に性格があるなどと云われるのはなぜか。その性格が単調ではなく変化するのはなぜか。そのような問いに楽器の物理的性質から一定の答えを与えてくれる面白い読み物となっている。



## 響きの科楽 ベートーベンからビートルズまで

ジョン・パウエル 著、小野木明恵 訳

原題は“*How music works*”である。変な当て字を使っているが、邦題は科学的な内容を、原題はむしろ心理学的な内容を意図しているように感じられる。実際の内容は原題に近く、物理的な内容を期待すると少々違和感を抱かれるかもしれない。この本で面白かった点は2つである。ひとつは、調性の違いによる音楽の性格の問題をそんなものはないと一刀両断にしていることである（但し、上掲の吉松の本にある解答は、このことを十分に意識した上での解答となっている）。もうひとつは、十分ではないが旋法の性格に関する議論がなされている点である。この本での旋法（mode）の性格づけは、長調および短調からの音程のずれ方だけで議論されているが、各音の周波数の比率からの議論の必要性を示唆しているようにも感じられて興味深い。



## 宗像教授異考録 全十五巻

星野之宣

これは、マンガである。大学の民俗学教室の教授がフィールドワークにおいて八面六臂の大活躍をするというきわめてニッチな作品である。一部ファンタジーのような部分もあるが、基本的な姿勢は論理的で真正直である。研究の姿勢や、民俗学の考え方など、学ぶことが沢山あり、著者の見識に敬意を表したい。現在、主人公は、英国に長期出張中という設定で刊行は休止状態であるが、再開を期待している。なお、シリーズに、『宗像教授伝奇考』（全7巻）がある。こちらは、『異考録』に先立つこと10年の作品である。

八戸工業高等専門学校

産業システム工学科 電気情報工学コース 教授

## 熊谷 雅美

専門：光物性（ひかりぶっせい；optical material）、励起子（れいきし；excitation）

ざっくり云うと、半導体の光学的特性の理論研究です。

N T T 物性科学基礎研究所に30年間勤務し、その後八戸高専に異動。



ハブブックセンター  
HACHINOHE BOOK CENTER

〒031-0033 青森県八戸市六日町 16-2 Garden Terrace 1F

TEL 0178-20-8368 web <https://8book.jp/>